

## 自ら考え、学ぶ授業作り — 授業の中の動機づけ —

### To Conduct a Spontaneous Class in Thinking and Learning — motivation in the classroom —

中里 裕子

(東京成徳大学大学院心理学研究科研究生)

指導教員 石崎 一記

(東京成徳大学大学院心理学研究科)

*Yuko NAKAZATO* (Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University)

*Kazuki ISHIZAKI* (Tokyo Seitoku University)

キーワード：内発的動機づけ、カウンセリングマインド

#### 1. はじめに

30数人のクラスには、いろいろな子供たちがいる。学校にすぐ馴染み友達を作れる子、ひとりが好きな子、友達が作りたいのに自分から動けない子、友達とうまく関われない子等々。ちいさな身体の中のちいさな胸を痛めがんばっている。みんな自分を認めてもらいたいのだ。そんな子供たちのまなざしひとつひとつに目を向けると笑顔で返す子、目をそらす子。

目を反らす子に心が動く。どうしたのかな。分からないのかな。何かあったのかな。不登校の兆しはそんなところからも始まっている。

学級の中に自分の存在を感じることでできる居場所がない。自分がみんなの役に立っていることが感じられない。自分に自信が持てない。勉強しても分からない。自分は何もできない。そんな気持ちを持ちはじめたら学校はつまらない場所であり、行こうと思う場所ではなくなる。そんな子供たちに教師は何をするべきか考えてみた。

不登校の子供たちに対して援助するのはもちろん

なのであるが、教師だからこそ、その前にすべきことがあると考える。それは、「授業」である。授業こそ教師の本分であり、子供たちが自分自身を作り上げていくきっかけを提供する場である。分かる喜びは楽しさになり、意欲や自信となり、アイデンティティの形成につながると考える。

本研究は、授業の中に一人ひとりの活動の場を保障し、ひとりひとりを認め合うことで、次の活動への動機づけが可能であるかを試みるものである。

1年間、研究生としてこのテーマに取り組み、その成果に基づいて授業案を作成し実際に授業を行った。その結果について、報告を行う。

#### 2. 学校適応と担任教師

学校適応とは、「学校の中でうまくやっていくこと」つまり、学校という家ではなく、親もいない、自分ひとりになる別の環境の中でうまくやっていくことなのだ。子供たちにとって「うまくやっていく」とは、どういうことなのか。学習につい

ていくこと、友達と交流できること、先生にしか  
られないこと。

これらのことは、すべて担任教師に関わって  
いることばかりである。親と離れたこどもたちが、  
親の次に安全地帯と考える対象は担任教師なのだ。  
だからこそ、教師はひとりひとりの子供たちが、  
自分が担任したクラスの中で適応していけるよう、  
配慮していかなければならない。学習についてき  
ているか。分からないで困っていないか。友達と  
交流できているか。さみしい思いはしていないか。  
がんばっていることは何か。認めていけることは  
なにか。

教師は、ひとりひとりの子供たちから発信して  
いるメッセージを感じ、子供たちが学校に適応し  
ていけるようにしていく、援助の担い手だと考え  
る。

### 3. 授業の力

教師の一番大切な仕事は、はじめにも述べたよ  
うに「授業」と考える。子供たちは、学校へ授業  
を受けに来る。授業の中から「学び」、生きてい  
く力を自分で育んでいくものとする。では、  
授業から生まれる力とは何か。

わかる授業を受けることで、子供たちは学びの  
喜びを持つ。できた、わかった、楽しい、の体験  
を伴った気持ちは、自尊感情や自己肯定感・自己  
有用感を育てる。これらが土台となって見方考え  
方が広がり、ポジティブにもの考えるようになり  
自分を変えていくことにつながっていく。学び  
の喜びは内発的動機づけとなり、自己決定力（生  
きる力）をつけていくこととなるのではと考えた  
(Figure 1)。

教師は、授業で子供たちに学びの喜びを持たせ  
ることができるのである。

### 4. 仮説

- ① 教材：身近な公園。身近な公園は何度でも繰  
り返し行くことができ、疑問等が起きたときも  
自分の目や耳を使って解決することができる場  
所である。考えたことをすぐ行動に起すことが  
できる場所は意欲を持続する力を持つと考える。  
また、身近であるためにすべての子供たちが関  
わることができる場所でもある。ひとりひとりの  
気づきや考えを共有したり、共感したりする  
ことができる。
- ② 課題：自然を直接体験することはどの子にも  
ハードルが高くなくできることであり、命のつ  
ながりについては1年生より繰り返し体験して  
いる。公園の中のたくさんのいのちのつながり  
について体験することで考えやすくなる。
- ③ 発問：閉じられた発問をすることでどの子に  
も考え、また答えられるようにする。開かれた  
発問をすることで考えたことや他の子と相談す  
る機会を作る。
- ④ 援助：ひとりひとりの行動や表情からその子

授 業



学びの喜び

- ・自尊感情
- ・自己肯定感
- ・自己有用感



自分を変える

- ・見方、考え方の広がり
- ・ポジティブ思考
- ・自己概念の変容

外発的動機づけ → 内発的動機づけ

- ・継続の力
- ・次へのステップ

自己決定

Figure 1 授業による変化

の心の動きを受け止め、その場にあわせた援助をすることで、自分のことを見てくれているという安心感を持つことができる。

これらを進めていく際に、教師のカウンセリングマインドに留意する必要がある。教師のカウンセリングマインドとは、児童の心理を十分に理解し、児童の気持ちになって児童の自立と成長の手助けとなる指導・援助・助言することである。

児童がどのような家庭に育ち、現在どのようなことで悩み、どのような気持ちを持って学校生活をしているのか十分理解して一人ひとりの子供に接することが大切である。これは、教師が持つべき基本のマインドである。

## 5. 小学校2年生生活科

### 「冬の町となかよしになろう」

冬の町や自然の様子を見たり聞いたり体験したりして感じることができる。また、他の季節と比較して一年間の季節の移り変わりに気づく。

## 6. 本時目標と展開

公園には、たくさんの生き物や植物があり、みんな命のつながりがあることに気づく。展開はTable 1の通りである。

## 7. 事例

本活動にあたり気にかかる児童が3名いた。

本研究では全体的視野も踏まえ、抽出児についても考えていきたい。

### 《抽出児》

F 男児：背が高く行動的。担任教師の指示はきかない。マイペースで自分の思いのままに行動している。集団に対しての心配りが薄い。

S 男児：自分からやろうとしない。いやだ。できない。ぼくは、やらなくていい。の言葉をよ

く言っている。友達に関わろうとしない。

H 女児：自分のおもいのままに行動している。友達と関わろうとしない。言葉を発しない。

### ① 学校から公園までの移動

校庭で子供たちと挨拶をした。元気におはようの声が返ってきた。後ろからついて引率した。元気な男の子たちが楽しそうにおしゃべりして歩いた。風邪がはやっていることや前日に休んでいたことなどはなしてくれた。

### ② はっぱ体操

公園の環境に入りやすいように「はっぱ体操」をやった。木になって葉っぱがかぜにゆれたり、くるくる回るまねをしたりする体操だ。

私の近くにいた子供達はにこにこしながら元気に真似をしていた。1人の女の子Hと二人の男の子(ひとりF)が遠くまではっぱの真似をしてもどってこなかった。まったく動かない子Sがひとりいた。ダックコールを吹くと興味を持って遠くに行ったKが帰ってきた。ずいぶん遠くまで風に飛ばされて飛んで行ったねえというにこっと笑っていた。その後、落ち葉の中をがさがさ歩き回り、ごろごろ転げまわった。女の子の中に転がらない子が何人かいたが、落ち葉をシャワーにしはじめるとみんなわいわい言いながらかけ合った。私にぶつけてくる子もいてキャーキャー言いながら盛り上がった。はっぱシャワーは、子供たちが作り出した活動だったのでしばらく自由に楽しんでもらうことにした。

### ③ はっぱジャンケン

担任の先生に出てもらいやり方を子供たちに教示。その後、子供に出てもらい見本をみせてからはじめる。勝ったら一枚葉を拾う。二度目は、前の葉より大きな葉を拾っていく。子供たちは、どんどん相手を変えてジャンケンしていった。私は、なかなか自分からいけないHのところへ行ってジャ

ンケンをしていった。自分から筆者のところへ来る子もたくさんいた。ジャンケンをして勝っても葉をひろわないSがいた。Sのそばに行ってジャンケンをした。筆者が勝ったので葉を拾った。持っている葉の数を数えた後、一番大きな葉を全員で見せ合った。大きさ比べをした。自分の持っている葉に自信のある子はどんどんチャレンジして大きさ比べをした。女の子が大きな葉チャンピオン

になった。みんなで拍手するとうれしそうにしていた。

つぎに小さな葉比べをした。途中で小さな葉を拾いなおしている子がいた。一番になりたいんだなあって思っていた。その子が一番になった。Fが「あれ、絶対ひろったんだよ」と言っていた。「ちがうよ。もっていたんだよ」と言い返していた。みんなで拍手するとうれしそうにしていた。

Table 1 本時展開

学習内容と活動	援助	動機づけとカウンセリングマインド
<p>公園の自然大好き、大事さがしをしよう。</p> <p>1. 公園に落ちている落ち葉を使って [はっぱジャンケン] をしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• どんどんふたり組みになり、じゃんけんをしていき、勝ったらどんどん大きなはっぱを拾っていく。</li> <li>• 大きいはっぱくらべをして、一番大きなはっぱの子をみんなで拍手する。</li> <li>• 小さいはっぱ比べをして、一番小さなはっぱの子をみんなで拍手する。</li> </ul> <p>2. 公園の自然大好き、大事さがしをしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 穴のあいた葉っぱをさがしてくる。みつけたら、もとのところに戻りみんなで見せ合い、なぜ穴が開いたのか考える。</li> <li>• 穴のあいていないはっぱを探してくる。見つけたら、元のところに戻り、みんなで触ったり、においをかいだりする。</li> <li>• 自分が面白いと思うものを探してくる。みつけたら、元のところに戻り近くの子と見せ合い、自分の自慢を話す。</li> <li>• みんなに紹介したいものを出し合い、ひとつ一つが公園の中の大事なものであることを知る。</li> </ul> <p>3. 公園のいきものつながりを考えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• みんなで円くなり、ひとり一枚ずつカードを持つ。</li> <li>• 一斉にカードを見せ合い、つながりのあるペアを探す。</li> <li>• ペアができたら、次はつながりのあるペアを探す。</li> <li>• みんなでつながりを考えて一つの円にする。</li> <li>• ひとりずつとなりの子とどんなつながりがあるか発表していく。</li> <li>• 感じたことや思ったことなどの分かち合いをする。</li> <li>• 公園の生き物や環境が一つのつながりになっていることを確認する。</li> </ul> <p>4. 公園で遊んだことで感じたことを感想カードに書く。 (教室に戻って行く。)</p>	<p>見つけられない子にアドバイスする。ジャンケンに入れない子とジャンケンをする。</p> <p>だれでも見つけられるものからはじめる。動き出せない子にどこにいけば見つかるか声をかける。面白いものでも、変なものでも、自分が「あっ」と感じたものでよいことを話す。</p> <p>できるだけ子供たちの力に任せる。こままっている子には、教えるのではなく、質問して答えを自分で導いていけるようにする。</p>	<p>• 教師が例示してみんなとジャンケンする。(動機づけ)</p> <p>• 大きいはっぱや小さいはっぱをみんなで比べてジャンケンで集めた葉を見合う。(受容・共感)</p> <p>• はっぱの穴からのぞいて楽しみ、形に着目できるようにする。(動機づけ) どんな風にたたたのか思いをはせられるとよい。</p> <p>• どんなものを見つけてきても否定しないで認める。(受容)</p> <p>• どの子も自分のみつけたもののができる場をつくる。</p> <p>• 見つけたものは、元のところに戻す。</p> <p>• 自分が見つけてきたものは、公園の自然にとって大事なものであることを知らせる。</p> <p>• 公園にいる生き物、植物をカードにする。クラスの人数分準備する。</p> <p>• 自分も輪の中に大切なものだと感じられるよう発表したら手をつないでいく。</p> <p>(自己開示)</p>

## ④ 自然大好きだじ探し

場所を移動して、「自然大好き、だじ探し」をする。はじめに、[あなのあいたはっぱ] 誰にでも取り掛かりやすいものにして、また視覚でもすぐ分かるように絵で示した。

すぐそばで拾う子、遠くまで飛んで行く子、探しながら歩いている子、ないとさけんでいる子。すぐ見せにきた子には、ほかにも探してみるよう声をかけた。ないとやっているSとは、いっしょに探した。全員が戻ってから近くの子と見せ合った。穴から覗き込んで外の景色を切り取ることをしてみた。面白いとわいわい言っていた。そこで、「この穴誰がどうして空いたのかな」と聞くと、「虫があけたんだ」「いも虫見たいのがたべたんだよ」「枝がささったんだよ」と返ってきた。それぞれ穴の開き方に着目しているんだなと感じた。「虫は、どうやって食べたのかな」と聞くと、動作化して答えてくれた。「歯でこうやるの」という子の考えから、いも虫みたいな虫には、歯があるのかもしれないという思いが生まれた。「教室で調べてみてね」と声かけをした。

つぎに、「木の実」を提示した。どの子も今度は進んで探しに行った。木の実が落ちていだろう木の下に行く子がたくさんいた。一年生から、何度も来ている公園ならではの行動ぶりだった。ジャンケンやその前のはっぱ探しでも活動しようとしないうちにSが進んで動き、すぐに拾った木の実を見せにきた。「おもしろい形だねえ。よく、みつけたねえ」というと「だって、お母さんといっしょに拾ったことあるもん」と返ってきた。「いつも、僕がこれ拾うんだよ」というので「だから、すぐみつけることできたんだね。すごいな」というとにっこりしていた。全員がもどってきたときに、Sが、手を上げてみんなに紹介していた。それぞれが持ってきた木の実をならべると、なんと10種類の実が集まった。子供たちも担任の先生も驚いていた。同じようになぜ大事か尋ねると「鳥の虫の食べ物だよ」「芽がでるよ」と返ってきた。つ

ぎに「おもしろいもの」と提示した。自然のもので自分がおもしろいとおもうものを拾ってくるよう話すと一斉に駆け出した。Fは、すぐさま探すことなく拾って戻ってきた。そして、これと見せた。それは、葉がまだついているすずかけの実だった。大きな実がゆらゆら揺れていた。そしてもうひとつ見せてくれた、「ハート」といった。小さなすずかけの実だったが、なんとハートの形をしていた。「わぁ、本当だ。ハートだね」「よく、みつけたね。後でみんなにも見てもらおう」というと小さくうなずいた。そして、筆者のそばにずっと座っていた。ひとりの子が大きなすずかけの葉を持ってきた。「握手のはっぱ」「わぁ、本当だ。握手だね」というとはっぱを差し出して握手させてくれた。くぬぎの小さな実をおへそそっくりと言って自分のおへそにはめ込んでみせてくれる子もいた。Hがそばに来て黙って石を見せた。「きれいな石だね。どんなところが気に入ったの」と聞くと「グレーのところと緑色があるところ」といった。「どれどれ、わぁ、きれい」というとにっこり笑っていた。みんなが戻ってきたので自分がみつけたおもしろいものを近くの友達とシェアしてもらった。みんなに紹介したい友達に発表してもらった。胸をはってうれしそうに話していた。Fは手を上げなかったので、筆者からFにみんなに紹介してくれるよう頼むと黙ってハートのすずかけを持ち上げて見せた。何も言わないので、筆者が「これね」と話すとFは「ハート」といった。「聞こえた」とみんなに聞くと「ハートだって。本当だ」とびっくりしていた。Fは、満足そうな顔をしていた。すると、Hが手を上げた。石をみんなにみせていた。「この石すごいんだよね。みんなに教えてあげて」というと色のことを話した。みんなに回してみせていくとどの子も食い入るように見て「ほんと、きれい」と言っていた。Hは自分のところに戻ってきた石手の中にぎっていた。Fは、自分のことが終わるとまた、1人で離れて遊び始めた。Kがいる場所を確

認しつつ、最後に筆者が事前に拾っておいた「おもしろいもの」を見せることにした。「じゃあ、わたしのおもしろいものみせるよ」とFにも聞こえるように大きな声でゆっくりと言った。Fは走って戻り、筆者の横に座ってバックの中を覗き込んだ。Fにはらっと見せるとびっくりしていた。その驚きに他の子どもなにになと興味深々に顔を近づけた。それは、緑のシダがくるくると丸まったもの。巨大ないも虫のように見えたので、みんなにはらーと見せるとキャーキャー言っていた。「じつは、はっぱだよ」と言うとなぁんだと安心していった。Kは、そのまるまった葉を手に乗せてみていた。大事なものがいっぱいあつまったことを確認し、教室にもって行きたいものはもっていいことを話した。

#### ⑤ ネイチャーループ

場所を移動して、ネイチャーループをした。みたけ台公園の環境に合わせたカードを準備した。竹・クローバー・風・あり・蝶のカードを加えた。ひとりひとり裏返したカードをとってもらった。ルールを説明してふたり組みをつくり始めた。Sは「僕はやらないから」と筆者に言ってきた。「じゃあ、O先生と一緒にやる」と聞くと頷いたので先生をお願いした。Hがひとりで動かずに不安そうに立っていた。Hのカードを見ると「はち」だった。「はちとつながるものないかなぁ」というと「分からない」と言った。みんなに「はちとつながるものないかぁ」と聞くと「あっ竹。竹やぶにいるよ」と教えてくれたので、Hは竹のカードの子そばに行った。悩んでいる子のそばに行って住んでいる場所や食べ物などをきいたり、クラスの子にアドバイスをもらったりしてなんとか2人組みができた。つぎは、ひとつの円になっていく。担任の先生にもサポートしてもらい、子供たちにもなにとつながるかなぁと質問しながらひとつの円にしていった。ひとりひとりとなりの子のカードにどんなつながりがあるか発表して手をつ

ないでいった。最後に全員の手がつながりみんなで手を上げた。どの子もみたけ台公園にかかわりのある自然であることを話、どれも大切なものであることを確認して終えた。

## 8. 事後のアンケート結果

事後に以下の項目についてのアンケートを行った。

- ① 公園で遊んで感じたことを書こう。
- ② 友達と一緒に遊んで思ったことを書こう。
- ③ うれしいと思ったことがあったら書こう。
- ④ 公園でやってみたいなぁと思うことが浮かんだら書こう。

①～④は、気づきや思いを聞いている。気づきや楽しさ、うれしさは内発的動機つけのものになるものとする。また、楽しさやうれしさは「学びの力」の原動力と考える。

以下はアンケートの結果である。

#### ① 公園で遊んで感じたことを書こう

公園で遊んで感じたことことばの中に子供たちの活動ぶりがあると感じた (Table 2)。すごい、やりたいからは強い思いが伝わってくる。その子の心に何かが残ったと考えられる。教師は、その後のこの子達の活動に心を配り援助できる可能性がある。

#### ② ともだちと一緒に遊んで思ったことを書こう。

友達と関わったことの楽しさを回答した子は女子が多かった。ふだん少数で遊んでいることが多いためと思われる。たくさんの人と関わることでいつもはやらないことを経験したり、ちょっとした勇気を出してやってみたり、友達の気づきを共有したりすることができたと思う (Table 3)。

#### ③ うれしいと思ったことがあったら書こう。

ここでは、「うれしい」と思ったことと聞いて



みた (Table 4)。うれしいことはこころの中に残っているものと考えたためである。焦点化した思いを書いた子は筆者に見せに来たり、クラスのみんなの前で認められた子たちばかりだった。ひとりひとりのそのときの顔が思い浮かんだ。自分の中から気づきや思いを外に出出することの大切さ思った。

④ 公園でやってみてほしいなと思うことがあれば書こう

Table 5に本時の体験がひとりひとりにどのように残ったかが伺われる。活動の継続を回答している子は、もっと深く体験したいという心が残っている。その後の活動に気づきの深まりが期待できる。活動の広がりには、ふたつのことが考えられ

Table 2 「公園で遊んで感じたことを書こう」の回答 (抜粋)

授業のねらいに迫るもの	気づき	思い	その他
<p>自然と自然はつづいているんだな。</p> <p>田んぼとか畑とかバッタとかいろいろカードがあって、みたけ台にあるものがカードにぜんぶあってそれが全部つながっているのが <b>すごい</b> と思った。</p> <p>自然が虫たちを助けているんだ。</p> <p>自然で大事ななと思った。</p> <p>公園ははっぱがたくさんあって生きているんだなと思った。</p>	<p>木の実はあるなに種類があるんだなと思った。</p> <p>公園だけで10種類の実があった。</p> <p><b>すごいな</b> と思った。(F)</p> <p>はっぱや実や木の種類がいっぱいあって <b>すごかった</b>。(H)</p> <p>自然がいっぱいだなと思った。</p>	<p>いろいろな自然があってびっくりした。</p> <p>自然ですごいな、人間の役に立っているな。</p> <p>自然がいっぱいだ。</p> <p>いろいろなおもしろい自然があるな。</p> <p>自然のことが前よりもすごく分かった。たのしかった。</p> <p>自然をもっと大事にしたい。</p> <p>生き物や自分のしらないことが分かっていて楽しくやれた。</p> <p>自然のゲームで遊んだら、自然ともだちになれたような気がした。</p>	<p>はっぱのジャンケンも <b>やりたい</b>。</p> <p>楽しかった。</p> <p>自然で遊んでいるなと思った。</p> <p>カードがつながっていくのが楽しかった。</p> <p>お宝探しですべっちゃいました。(S)</p>

Table 3 「ともだちと一緒に遊んで思ったことを書こう」の回答 (抜粋)

ともだちとの関わり	個の思い	その他
<p>一緒に遊べて楽しかった。</p> <p>ともだちと遊んで <b>すごく</b> 楽しかった。(H)</p> <p>みんなと遊べて楽しかった。</p> <p>みんなで遊ぶと <b>ちょっと違う</b> と思った。</p> <p>ふたりか三人よりも <b>みんなで遊ぶ</b> <b>ほうがいい</b> と思いました。</p> <p><b>友達</b>がいろいろなはっぱを集めてて <b>すごい</b> と思いました。</p> <p>ずるいことしなかったから楽しかった。</p> <p>ジャンケンでいっぱい負けただけど楽しかった。</p>	<p>自然も遊べるんだな。</p> <p>もっと自然で遊びたい。</p> <p>自然の遊びで遊びたい。</p> <p>小さいはっぱとか大きいはっぱとか形もいろいろあってはっぱが <b>思ったよりいっぱい</b> あってびっくりしました。</p> <p>はっぱの上に寝たり転がったりして <b>気持ちいい</b> と思いました。</p> <p>カード遊びで <b>あんなつながりがあるんだ</b> と思った。</p> <p>はっぱに大きい穴があった。</p> <p>いろんなつながりがあるんだなと思った。</p> <p><b>木の実の中を割った</b>。</p> <p>すごくいっぱい木の実があった。</p>	<p>すごく楽しかった。</p> <p>楽しかった。</p> <p>またやりたい。</p> <p>マウンテンみたいなのところがあった <b>おもしろかった</b>。(F)</p>

Table 4 「うれしいと思ったことがあったら書こう」の回答（抜粋）

全体的な思い	焦点化した思い	その他
みんなと遊べてうれしい。 みんなと仲良く遊べたのがうれしい。 自然で遊んでうれしかった。	<p>実をいっぱいひろったこと（S）</p> <p>ジャンケンで二回だけしか勝てなかったけど、うれしかった。</p> <p>はっばジャンケンで六回勝ったこと。</p> <p>生き物がたくさんいて楽しかった。</p> <p>カードが繋がった。</p> <p>まるまっているはっばを見つけた。</p> <p>いろんな木の実があった。</p> <p>見つけたいものが見つかったときうれしかった。</p> <p>きれいな石を見つけた。（H）</p> <p>のうみそを見つけた。</p>	<p>生き物が全滅しなでよかった。</p> <p>おもしろかった。</p> <p>中学校で知っている人がいてよかった。</p> <p>中里先生に会えてうれしかった。</p>

Table 5 「公園でやってみたいなあと思うこと」の回答（抜粋）

活動の継続（5人）	活動の広がり（14人）	その他（12人）
<p>はっばの上でころころ転がる。</p> <p>はっばの中でゲームしたい。</p> <p>また、みんなでカードゲーム（ネイチャーラップ）したい。</p> <p>実を拾いたい。（S）</p> <p>はっばジャンケンやりたい。</p>	<p>木登り。</p> <p>穴を基地にしたい。</p> <p>公園にあるものでしとりしたい。</p> <p>自然あそびがしたい。</p> <p>今度は自分でお気に入りのものを探したい。</p> <p>虫や木と友達になりたい。</p> <p>ターザンしたい。</p> <p>自然バスケットやってみたい。</p> <p>もっと自然をみつけているいろいろなはっばや木の実などを知りたい。</p> <p>いろんな秘密基地を作れたらいいな。（F）</p> <p>何かの種をみつきたい。</p>	<p>みんなでかくれんぼやおにごっこかやりたい。（H）</p> <p>ボール遊び（サッカー・ドッジボールなど）</p> <p>クラスみんなで遊びたい。</p>

る。ひとつは、自分がもともとやりたいと思っていること。もうひとつは、体験したことで新たに湧き上がった思いである。これは、内発的動機付けになったと思われる。その他については、友達と関わることの楽しさや人とのかかわりの力が期待できる。

## 9. 考察

### ① 内発的動機付け

今回の活動の中で、次への活動の意欲（内発的動機付け）があったと考えられるものは、アンケー

トの結果④の活動の継続・活動の広がりから伺える。31人中19人が次への活動を示唆している。体験して気づいたことからの深まりの意欲や広がり意欲が生まれている。これは、与えられた活動であるが、体験そのものは自ら考えて動き、自らの感性で獲得した気づきであるためと考える。「すごいなあ」と感じたこと。「たのしいなあ」と思ったこと。「うれしいなあ」と思ったこと。「もっとやりたい」と感じたこと。このような気持ちを持たせる外発的動機付けを設定し、その活動を子供たちが自分の力で創造し獲得していくことで内発的動機付けが出来るのではないかと考えられる。



具体例では、Fを取り上げる。Fは、はじめクラスの子とかかわらず自分の好きなように行動していた。Fが自ら行動し始めたのは自然大好き大事探しからだ。「木の実探し」から進んで探しはじめていた。そのとき、すずかけの実を見つけていたが、何かを興味深く見ているFに筆者は気づいた。何かあるんだなと心にとめておいた。自分の好きなものを探すところになるとFは真っ先にそこへ行ってすぐに拾って持って来た。それが、ハートの形のすずかけだった。ああ、これだったんだなとFの興味を知った。このハートの実がみんなに認められたことをFは喜んでいて。アンケートでFは、「公園に10種類も木の実があるなんてすごいなあ」とみんなでシェアしたことに興味を持っている。また、公園で秘密基地を作りたいと活動の広がりを見せていた。はじめは、関心のないFだったが、みんなに認められたことで自尊心や自己有用感もてたのではと考えられる。そのことで次への活動の意欲ができたのではないかと推察できる。また、Sはほとんどの活動が自分から動くことができなかつたが、唯一実を探すことができた。母親と一緒に拾った経験があったため、自信をもって自分から実を拾い筆者に胸を張って見せに来た。また、その実をみんなに紹介できたことが大きな喜びになったようである。アンケートでは、実をいっぱい拾ったことがうれしいと答え、やってみたいと思うことにも木の実を拾うことと答えている。Sの実を拾う活動を広げていく援助を教師が継続していくことができれば、Sの自尊心が育ち自己決定力も育っていく可能性を感じた。

今回の授業では、同じ公園で「公園にあるものしりとり」「自然バスケット」「自然あそびづくり」など子供たちの感性を生かした新しい活動に広げていく可能性を十分に感じる。子供たちの思いを生かした授業構成や特別活動へ広げていくことも考えられる。

授業の中にひとりひとりが自分の考えで行動す

る場面をつくり、その行動や発見・努力を認め肯定することで、内発的動機づけとなり、安心して次の学びへ進んでいけるものとする。

## ② カウンセリングマインド

授業の中ですべての子供に常に目を配ることは、至難の業である。だが、一人ひとりの気づきや思いを自分の中からアウトプットさせていくことはできる。今回は、見つけてきたものを隣の子とシェアしたり、グループでシェアしたりする時間を作った。さらに、自分だけでなく友達のもので見てみたいと思ったことやみんなに紹介したいと思うことを言える時間を設定した。普段から自分だけでなく、友達のすごいところやすばらしいところをクラスの人々に紹介していける雰囲気や時間を設定していくことで、いろいろな子が認められる機会を増やすことができると考える。教師一人ですべてをしようとするのではなく、クラスの子供たちみんながカウンセリングマインドを持っていくことが望ましい。

また、日々の生活の中で気になる子が毎日のように入れ替わり立ち代り出てくる。この子たちを心に留め置いて全体をみていくのだが、援助が必要な時や場面を逃さないでいられる心を持っていることも教師のカウンセリングマインドと考える。本時では、Hがみんなとかかわれずにいてなかなか自分で動き出すことができないでいることが気にかかった。Hははじめみんなからはずれ遠くへ行っていて一人で過ごしていた。筆者は、Hのいる場所を確認しつつHにも聞こえるようにおおきな声で活動の内容を話した。はっぱじゃんけんになるとそばへやってきたが自分から友達のところへ行くことができないでいた。筆者は、Hのそばに行き元気にじゃんけんをした。できるだけHの近くでじゃんけんを続けると筆者のそばに来た子たちが、どんどんそばにいるHとじゃんけんを始めた。Hは勝ってはっぱをたくさん拾うことができ、うれしそうにしていた。アンケートでHは、「みんな

なで遊んだことが楽しかった」と答えている。また、公園でやりたいことも、クラスみんなでかくれんぼや鬼ごっこをやりたいといっている。なかなか自分から動くことはできずにいるが、友達とはかかわりたいという気持ちを持っているんだなぁとHの思いを知ることができ、今後の援助の方向が見えたように感じた。また、Hはきれいな石を拾って来たが黙って筆者のそばに立っていた。何かあるのだなと思いをかけると手の平を開いて石を見せてくれた。「きれいだねぇ」というと「青いところと茶色のところがあるの」といって青いところを指差した。「本当だ。すごいのみつけたね。きれいだねぇ」というとにこっと笑っていた。みんなが戻って全体でシェアをはじめると、Hも手を上げて石のことをみんなに紹介した。みんなが見せて見せてといい、見るたびごとにおーと驚くクラスの子の姿を見て、Hはとても満足そうだった。そのときHはちゃんとみんなの輪の中に自らいた。アンケートでも、うれしかったことに「石を見つけたこと」を書いていた。Hは同じようにきれいと感じてくれたことに喜びを感じ、そのことが自尊感情の種を蒔けたように感じた。クラスのみんなへの見方や考え方が変わっていけばHもポジティブに行動しはじめるのではないかと考える。子供たちは、自分の見つけたものや気づいたことを見せにきたり話しにきたりした。どの子もその驚きやうれしさを同じように一緒に感じてほしいのだ。また、そばに来ることのできない子供たちにも、ちゃんと見ているよ。気がついていよというサインを教師がおくることで安心できると筆者は考える。

## 10. あとがき

子供たちのきらきらしている目は、なんと多弁なのか。子供たちは体中で話している。言葉を発しなくても話している。そんなことを感じる授業時間だった。教師は、子供たちに何を教えるのか。

もちろん学習内容がある。だが、それだけではない。自ら考え、自己決定し、自ら行動していく。そんな子供たちになってほしい。

そのサポートをしていきたいと思った。

## 参考文献

- R L ウラッドコースキー著 丹羽洋子・鳥塚秀子訳  
1994 やる気を引き出す授業—動機づけのプランニング— 田研出版
- 新井邦二郎著 1995 教室の動機づけの理論と実践 金子書房
- 松原達哉著 1998 カウンセリングを生かした授業作り 学事出版
- 角田豊著 1999 カウンセラーから見た教師の仕事—学校の機能 培風館
- 北尾倫彦・速水敏彦著 1986 わかる授業の心理学 有斐園選書
- 工藤力著 1999 しぐさと表情の心理分析 福村出版
- 山際敏和 2005 小学校は何を教えるところか—そだちの科学— No. 4
- 坂本玲子 2004 学校の適応障害—こころの科学— No. 114